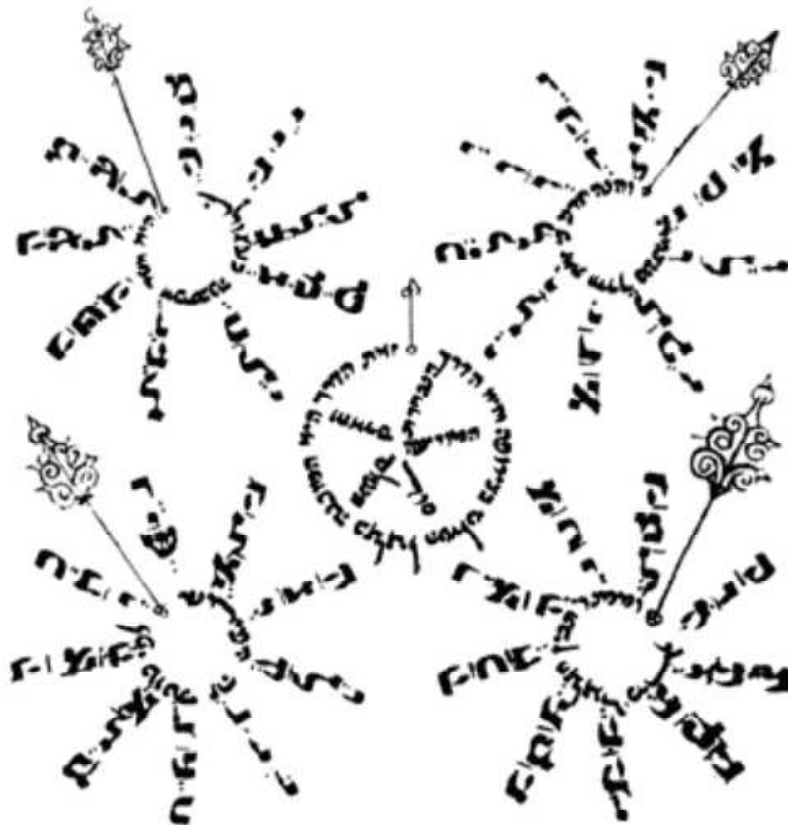


秋 分 儀 式

I :: O :: S :: 儀式魔術文書 AE13A



THE OFFICIAL ORGAN
OF

I :: O :: S ::

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I :: O :: S ::

THE AUTUMN EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I :: O :: S :: ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春秋分点の前後48時間以内に実施すること。2013年の秋分点通過は9月23日(月)午前5時44分(日本標準時)である。儀式内容は、アブラフィア学派の技法に獅子のカバラを加味した混合の技法を用いて秋分の祝祭を実施する。

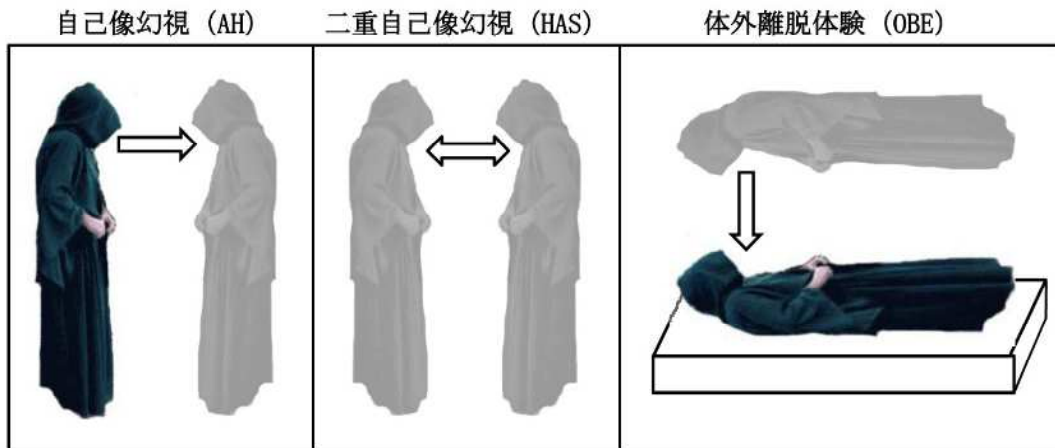
1 カバラの背景

(1) 自観像

春秋分点の儀式に用いる魔術の型は、セフィロト神殿を用いる場合は、「平面界への上昇(Rising on the planes)」⁽¹⁾ 又は「アストラル旅行」⁽²⁾ となることが多い。これらに共通するのは、物理的肉体を後に残し、意識を遠隔地に投射することである。

心理学的には、これを自観現象(Autoscopic Phenomena)という。

ただし、見え方、主観の位置により、次の3種類に分かれる。



(S. Arzy, M. Idel, T. Landis & O. Blanke, 2005 に一部加筆)

上図の左端は、自己像幻視(Autoscopic Hallucination)である。これは自己像(図の右側のやや薄い立像)を自分の体外空間(物理的身体境界の外)に自分の身体を見る幻視体験である。いわゆるダブルを見るという体験であり、自己像幻視(AH)における主観的視点は、左側の物理的肉体からの自己中心的視野となる。

右端の図は、世に知られた体外離脱体験(Out-of-Body Experience)である。この時、主観視点は横臥した肉体の上を漂っている。この状態で自分の肉体と世界を見るのが体外離脱体験(OBE)である。

中央は両者の中間段階であり、二重自己像幻視(Heautoscopy)という。このとき主観位置は一定せず。物理的肉体と体外像との間を移動する。しかも、複数の体外像を造り出すことがあり、二重自己像幻視(HAS)の主観視野は像から像へとシフトしていく。

(1) 平面界の上昇を行う術者は、光体を纏い、柱を超え、マルクトからセフィロトの小径に入り、矢の径を通り、ケテルに到達するとき、魔術師の意識は超越者の光に近づくとされた。Israel Regardie, *Tree of Life: An Illustrated Study of Magic*, St. Paul: Llewellyn Publications, 1932, 3rd edition 2003 edited by C & S. T. Ciceros, pp.365f.

(2) アストラル旅行の概念は、1929年の『アストラル体投射』(Muldoon & Carrington)に強い影響を与えられたが、それ以前のエリファス・レヴィが「星幽光(Astral Light)」なる単語を多用したように、魔術師には自明の理論であった。J. H. Brennan, *Astral Doorway*, Wellingborough: The Aquarian Press, 1971, p.2

モーシェ・イデル等は、アブラフィア学派の恍惚のカバラ実践における上記の自観現象の出現を検証した。その結果、採用する技法によるが、二重自己像幻視 (HAS)、自己像幻視 (HA) が多く、単純な体外離脱体験 (OBE) は見られないことが判明した。⁽³⁾

特に、アブラフィア学派では二重自己像幻視が重要になる。術者は、目を閉じてヒトボデドゥースに入る。⁽⁴⁾ 目を閉じるのは、術者のすべての器官を仮想的に無化して、隠された知性が潜在領域から活動領域に移るためだとも言う。⁽⁵⁾ そして自分と類似した顔の人型と対面し、対話する。対話の際には、対面する人型の天使の話す部分は自分が発声する。そのとき声音が変わり、他者と応対しているように聞こえる。⁽⁶⁾ 自作自演だと反駁されるかもしれない。しかし、心理学的、生理学的側面は、一面的な視点にしか過ぎない。自分の姿をした天使が眼前に表れ、対話の答えが自らの唇から響いても、それは神意と神秘の顕れに過ぎない。

何故なら、術者はすでに「魔術的意識 (magical consciousness)」状態にあるからだ。

プラトンは、可視的世界 (物質界) と永遠的世界 (イデア界) との連携は「分有 (メテクシス)」により成立すると説いた (『ティマイオス』29d)。⁽⁷⁾ 魔術的意識のキーワードも分有 (participation) である。⁽⁸⁾ 魔術師が発揮する力は、宇宙創造において神の行使した創造の業 (マセー・ベレシト) に分有することで成立する。⁽⁹⁾ この特別の状態に移行した意識を、魔術的意識という。⁽¹⁰⁾ 自ら魔女のカブに参加した社会人類学者グリーンウッドは、分有こそ魔術的意識の基礎であると語った。⁽¹¹⁾ この分有とは、レビ・ブリュルの分有の法則から波及したものである。彼女は、変成意識状態 (ASC) や、ハーナーのジャーマン意識状態 (SSC) と比較しつつ、魔術的意識とは想像力を自然の霊性と結びつけて発展させた拡張型アウェアネスと捉えていた。⁽¹²⁾

魔術的意識にある術者は、矢を放つ準備ができています。

熟練の魔術師コリン・ロウは、召喚魔術の解説のなかで、魔術的意識に入り、意識の方向づけを行う制動を達成したあとは、魔術円の形成／門の開放／諸力の召喚／魔術意図の宣言／主儀式／諸力の解放／門の閉鎖／魔術円の解除の順で行うと概説している。⁽¹³⁾ 単純な召喚魔術と秋分儀式では手順が異なるが、ここで着目すべきは、力の入出経路として門を設定していることだ。より類似した霊魂投射について検討したタイソンは、儀式を支える要素を次のように区分した。すなわち、部屋／門扉／鍵／回廊／昇降機／姿勢／動作／音響／イメージ／意志である。⁽¹⁴⁾ 部屋は起点となる魔術儀式を行う場所であり、秋分儀式ではマルクト神殿となる。門扉はマルクトから上位のセフィロトに伸びる三つの門を考えても良いが、セフィロト神殿全体を俯瞰して、四方に門扉を設定する場合もある。つまり、正面たる東方はティファレト、西方は

(3) S. Arzy, M. Idel, T. Landis & O. Blanke, "Speaking With One's Self : Autoscopic Phenomena in Writings from the Ecstatic Kabbalah, " in *Journal of Consciousness Studies*, 12, No.11, Exeter : Imprint Academic, 2005, pp.4-30.

(4) Moshe Idel, "Appendix : Hitbodedut and the Shuttering Eyes," in *Jewish Spirituality from the Bible through the Middle Ages*, New York : The Crossroad Publishing, 1986, p.435.

(5) Aryeh Kaplan, *Meditation and Kabbalah*, York Beach : Samuel Weiser, 1982, p.113.

(6) Moshe Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, Albany : State University of New York Press, 1988, pp.95-100.

(7) アンソニー・メレディス『カッパドキア教父：キリスト教とヘレニズムの遺産』新教出版社、2011年、35頁。

(8) プラトンの場合には、イデアと感覚的事物、その間のメテクシス (分有)、つまり、イデアに何らかの形で興る、パーティシペイトするという仕方で、感覚的事物の存在が成り立っている (『西谷啓治著作集』第2巻、創文社、1991年、57頁。)

(9) B. J. Gibbons, *Spirituality and Occult : From the Renaissance to the Modern Age*, London : Routledge, 2001, p.39.

(10) Ariel Glucklich, *The End of Magic*, New York : Oxford University Press, 1997, p.12.

(11) Susan Greenwood, *Nature of Magic*, Oxford : Berg, 2005, p.91.

(12) Carl von Essen, *Ecomysticism : The Profound Experience of Nature as Spiritual Guide*, Tronto : Bear & Company, 2010, p.131.

(13) Colin Low, *Ritual Theory & Technique*, originally circulated on the Usenet c.1990, n.p.

(14) Donald Tyson, *Soul Flight : Astral Projection & The Magical Universe*, Woodbury : Llewellyn Publications, 2007, pp.161-173.

シェキナー、北はディン（ゲブラー）、南はケセド（ゲドゥラー）となる。この場合、東の門を開くとはティファレトの流体を引き込むことに他ならない。⁽¹⁵⁾

タイソンによれば、門扉とは魔法円の唯一の出口であり、魔法円の中心でもある。中心点は拡張点でもあり、そこからアストラル体を投射する。アストラル界においては、中心に開いた裂け目を円周に置き換えることは可能であり、魔術神殿の門扉は何処に置こうと魔法円の中心であり、エジプトの偽門のように物理的に開かない門も、扉として機能する。⁽¹⁶⁾

門を通過して、飛翔する意識体は光体をまとっている。当団の魔術的手順によれば、アケファロスのかたちをした光体をまとい道行きを行う。この神の姿形をまとう方法論は、カバラの古式に学んだものである。⁽¹⁷⁾

（２）相貌の結合

アブラフィア学派のアッコンのイサクは、13世紀後半から14世紀前半にかけて活躍したカバリストであるが、様々な魔術的技法を残した。⁽¹⁸⁾ 特に文字の操作が巧みであり、文字を分解し、色彩をつけて視覚化し、強い想像力で変形させ神聖な領域に投射した。祈祷の言葉は天に昇り、天使サンダルフォンの手により神聖なる王冠となるという信仰があるが、イサクは洗練された技法でこれを仕上げた。⁽¹⁹⁾ 天から神聖なる光を引き下ろすカタバシスと術者の体内にある光を送り出すアナバシスは対の行動である。この光の上下運動を「誘引（הַשְׁמָטָה ハムシャカー）」という。後世のコルドヴェロは、祝福（ベラカー）は引き下ろす（ハムシャカー）ものであり、上位セフィロトから最後のセフィロトであるマルクトまで、そして流体をマルクトから下位存在に引き下ろすことと概観した。⁽²⁰⁾ 一見してお判りのように魔女術における「月神降臨（Drawing down the Moon）」や「太陽神降臨（Drawing down the Sun）」はハムシャカーの特異例である。

さて、アッコンのイサクは、光を送り出す儀式にはケテルを象徴化した「至高点（קוֹרֵן）」を用いた。⁽²¹⁾ この至高点の象徴的位置として右手を頭頂部の少し上にかざし、母音記号ホレム（オォー）を用いて光を上昇させ、母音記号シュレク（ウー）を用いて光を下降させる。⁽²²⁾

しかし、光を内生する必要がある、この部分はアブラフィア学派は明確な指針を示していないことから、獅子のカバラのパルツフムの生成に関する「結合（קוּבּוּץ）」理論を転用した。

すなわち、小さな貌（זֶאֱמֹלֶת אֲנִפִּי）は、母（אִמָּא）の子宮から生まれるが、そのために三つの形成力（מְוָחִי）が作用する。第1の形成力を「受胎（כְּבֹרָה）」と呼び、父と母が顕現し、実生のZ”Aが受胎しているが、世に出る径は示されていない。第2の形成力を「未成熟（כְּתָנִית）」と呼び、父、母に加えてダアスが顕れ、三角形を構成するが、まだ、その連結は弱く未成熟である。第3の形成力を「成熟（גְּדֻלָּה）」と呼び、父、母、知識は

(15) Byron L. Sherwin, *Kabbalah : an Introduction to Jewish Mysticism*, Lanham : Rowman & Littlefield Publishing Group, 2006, pp.78f.

(16) Tyson, op. cit. p.164.

(17) Karl E. Grozinger, "Between Magic and Religion : Ashkenazi Hashidic Piety," in *Mysticism, Magic and Kabbalah in Ashkenazi Judaism*, Berlin : Walter de Gruyter, 1995, p.31.

(18) Mosh Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, Albany : State University of New York Press, 1987, p.33.

(19) Moshe Idel, "Reification of Language in Jewish Mysticism," in *Mysticism and Language*, New York : Oxford University Press, 1992, pp.42-79.

(20) Moshe Idel, *Hasidism : Between Extacy and Magic*, Albany : The State University of New York Press, 1995, p.71.

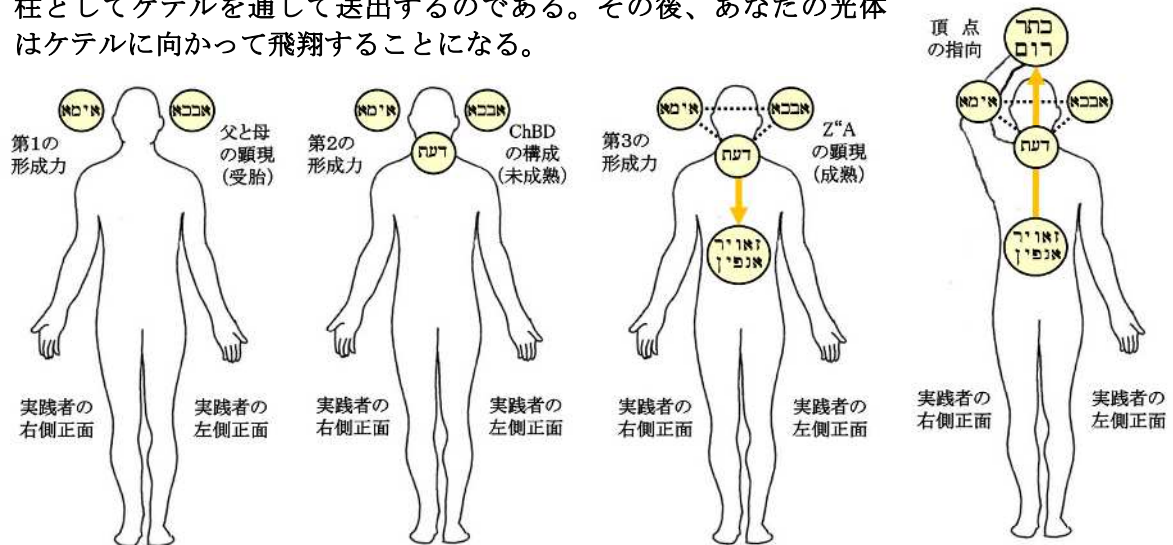
(21) Arthur Green, *Keter : The Crown of God in Early Jewish Mysticism*, Princeton : Princeton University Press, 1997, p.154.

(22) Eitan P. Fishbane, *As Light before Dawn : The Inner World of a Medieval Kabbalist*, Stanford : Stanford University Press, 2009, pp.146-150.

成熟し、Z" Aを生む。⁽²³⁾

カバラにおける構造的な力 (isomorphic power) を指摘したのは、ジョナサン・ガーブだが、⁽²⁴⁾ 上記を総合し、音韻の祈禱の枠組みを拡張してみよう。

下図の左から右に抜けるプロセスを順次行い、内的な力をティファレト中枢に圧縮し、光の柱としてケテルを通して送出するのである。その後、あなたの光体はケテルに向かって飛翔することになる。



2 司官の配置

(1) 司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR (P C)、すなわち「先導者」の1名である。

P Cは、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い。白のネミスをかぶり、マントやその他の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশヨナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオン・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体（かれらはアストラル体と呼称）を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間 (Robing Room) において、光の法衣を纏う。

(2) 律法の宰相の召喚

司官は、マルクト神殿で律法の公爵を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上「肉の衣を去る」までは、実効上の神（天使を使役する者）として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

3 アストラル神殿の構造

マルクト神殿を使用する。

(23) Lawrence B. Fine, "Techniques of Mystical Meditation for achieving Prophecy and the Holy Spirit in the teachings of Isaac Luria and Hyyim Vital," Ph.D. dissertation, Branderis University, 1975, p.48.

(24) Jonathan Garb, "Power and Kavvanah in Kabbalah." Ph. D. diss., Hebrew University, 2000.

4 身辺の準備

(1) 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。(家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等)、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に快適な椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

部屋を薄暗くする。小さな照明を利用する場合は、背後に置き、その光を直視しないように配置する。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

(2) シナリオ

シナリオ文書を単純化したので可能ならば記憶してもらいたい。記憶できない場合でも黎明視の妨げとなるので、テープの使用は控え目に。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

神聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

(3) 直前の手順

開始する前に手を洗い(儀式的沐浴)、法衣(または身体を締め付けない服装)に着替え、LBRPを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

第2章 儀式

1 神殿への入場

この準備的作業は、光体のレベルではなく、生身の肉体で行う。

参加者は、東に面して座り、目をかすかに開き（いわゆる半眼の状態）にする。視線は足下に落とし、家具などの周囲の状況が明確に像を結ばないようにする。瞼を開く程度を変えて、この焦点を結ばない状態を維持する。気持ちが悪くなった場合は、普通に眼を開いて、もう一度調整する。

半眼のまま、深く呼吸をする。呼吸は肺だけではなく、全身の皮膚を通して行う。一息ごとに、喉や鼻孔のみならず、全身の皮膚から、周囲に満ちている生気が肉体に吸い込まれ、全身の細胞を活性化させる。

あなたは光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとボアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたI O Sの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るP Cが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」P Cは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話の形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。

P Cは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

P Cは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。

引き続き、小六芒星の追儼儀式及び物見の塔の儀式を行う。

参加者は、その動きを廊室から、おぼろげな円運動による渦の発生として捉える。詳細なP Cの動作を視覚化する必要はない。

4 入場及び宣言

P Cは神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

P Cの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。

兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち、姉妹たちは左側、北の壁際に立つ。

P Cは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

P C : 「I ∴ O ∴ S ∴ の兄弟姉妹たちよ。秋分の儀式を開始せん。」

5 律法の宰相の召喚

PC : 「七つの封印を光体に刻印せん。」

PCは聖なる名前を唱えたあと、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

参加者もPCの動作に倣う。

PC : 聖名とともに唱える。「アブリース ススティイー。わが脚を封じる。」

(אֲרִיסְטִיסְטִיִּי)

全員 : 「わが脚を封じる。」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。

PC : 聖名とともに「アバグ バググ。わが心臓を封じる。」(אֲבָגּוּגּוּ)

全員 : 「わが心臓を封じる。」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。

PC : 聖名とともに「アリム ティパー。わが右腕を封じる。」(אֲרִימְטִיפֶּר)

全員 : 「わが右腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。

PC : 聖名とともに「アブリース セシー イアー。わが左腕を封じる。」

(אֲרִיסְסִישִׁיִּיאֶר)

全員 : 「わが左腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を首に当てる。

PC : 聖名とともに「アビス セル バグ エル ヤーブ ドゥーエル。わが首を封じる。」

(אֲבִיסֶּרְבָּגְּעֶלְיָאֵרְדּוּאֵל)

全員 : 「わが首を封じる。」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。

PC : 聖名とともに「アブ パク キテル スス エイカド ヤドヤド ヤー。わが生命と

すべての部分を守護するために。」(אֲבָפָקִיקֵטֶלְסִסְאֵיקָדוּיָדוּדוּיָאֵר)

全員 : 「わが生命とすべての部分を守護するために。」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

PC : 聖名とともに「オーブ パス ヤーウ キーブ ヨー ザハブ ヤーウ ティティス。

わが天蓋を封じる。」(אֲוֵבְפָאסְיָאֵוּקִיֵּבְיוֹזָהָבְיָאֵוּטִיטִיס)

全員 : 「わが天蓋を封じる。」

PCは封印の完成と律法の宰相への呼びかけを行う。

祭壇の傍らにいるPCの上に覆い被さるように出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、律法の宰相のテレズマ的姿形が融合し、再形成されてPCの霊的外形が急激に変化する。

PCが宣言する。

PC : 「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。

四風を聖化するは、われなり。

五界を結ぶは、われなり。」

6 四風の聖化

P Cは東を向いて宣言する。

「I ∴ O ∴ S ∴ の神殿に四方位（よも）の風を召喚せん。」

神殿の東壁の中央に扉が現れた。

P Cは、東に向い高らかにヘブル語を詠唱する。それは、四方位の風をふるわせる呪歌である。

P C : 「エロウイイー

('הָאֵל わが力の根元よ。)

ネシャマー・シェー・ナタフター・ビー

('בָּ שְׁמַח שְׁוֹאָה] שְׁוֹאָה 汝が授けし息吹よ。)⁽²⁵⁾

テホラー・ヒー

('הָ טָהוֹרָה そは清浄なり。)

アター・バラーター

(אֲתָה בְּרָא אֲתָה 汝がそを創造せり。)

アター・ヤツアルター

(אֲתָה יָצַר אֲתָה 汝がそを形成せり。)

アター・ネファクター・ビー

('בָּ אֲתָה נָפַח אֲתָה 汝はそを我に吹き寄せる。)

ヴェ・アター・メシヤムラー・ブキルビー

(וְאֲתָה מְשַׁמֵּר בְּקִרְבִּי 汝は我がうちにあるそを監視する。)

ヴェ・アター・アティード・リット・ラー・ム・メフニイー

(וְאֲתָה אֶטֶר לְטַלְאֵי מִמֶּנִּי 汝はいつかそを我より取上げる。)」

全員 : 「バラフター・ヴェ・ヤツアルター

(אֲתָה יָצַר אֲתָה בְּרָא 創造と形成)」

P Cは、東の方向に宝瓶宮のサインを描く。

P C : 「ヒー・ネイ・ニー ('נִי הֵנָּה われはここに)

ヒー・ネイ・ニー ('נִי הֵנָּה われはここに)

ヒー・ネイ・アーニー・ヤー ('נִי הֵנָּה הֵנָּה われはここに、神の息吹の)

アナ・ホウシーアー (אֲנִי הֵנָּה הֵנָּה 加護のあらんことを)」

全員 : 「ヤー・アナ・ホウシーアー

(אֲנִי הֵנָּה הֵנָּה 息吹の加護あらんこと)」

P Cはヨド・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

P C : 「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ペーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

全員 : 「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ペーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

東の壁いっぱい、黄色い照り返しを浴びた雲海がひろがる。

雲海は下から湧きあがる雲の断片で沸騰するようだ。

その黄色い雲の渦の中心に、仄かな薄暗い陰が生まれる。

その陰は人型をつくる。人型の頭部が紫色の光を放つ。

(25) 来る (בָּא) の変化形 ('בָּ) は、「霊が我がうちに入りたり (וְהָיָה בְּךָ רִיחַ קֹדֶשׁ)」(『エゼキエル書』2 : 2) のように使われる。

これはエロヒムの影だ。

P Cは、祭壇の南に回り、南の方向に獅子宮のサインを描く。

P C : 「アーニー・ボー (וְאֵנִי וְאֵנִי われと名前なきもの)
アーニー・ボー (וְאֵנִי וְאֵנִי われと名前なきもの)
エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)」

全員 : 「エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)」

南の壁いっぱいに、紅蓮の炎が燃えさかる。
爆発的な溶岩の噴出、燃え上がる硫黄の噴煙を炎の陰に垣間見る。
その炎の壁のただなかに、巨大なたてがみのある生き物が見える。
強靱な爪のある筋肉の束が炎を掻き分ける。
それは獅子のすがたをもつ炎である。

P Cは、祭壇の西に回り、西の方向に天蠍宮のサインを描く。

P C : 「アーニー・ボー (וְאֵנִי וְאֵנִי われと名前なきもの)
アーニー・ボー (וְאֵנִי וְאֵנִי われと名前なきもの)
ホウシーアナ (הוֹשִׁיעָנִי われを助けよ)」

全員 : 「ホウシーアナ (הוֹשִׁיעָנִי われを助けよ)」

P Cはヴァウ・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

P C : 「ヴァウ」(呼気)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

全員 : 「ヴァウ」(呼気)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

西の壁いっぱいに、ブルー・オーシャンがひろがる。
それは砂浜近くの明るい海水ではなく、海底の伺えない深海の青黒い海原である。
小島ほどもある巨大なうねりが押し寄せてくる。
その大うねりの海水の表面に、途方もなく巨大な翼ある生き物の影が映る。
それは鷲の翼のようである。

P Cは、祭壇の北に回り、北の方向に金牛宮のサインを描く。

P C : 「アーニー・ボー (וְאֵנִי וְאֵנִי われと名前なきもの)
アーニー・ボー (וְאֵנִי וְאֵנִי われと名前なきもの)
エレッツ・カーナーニー (אֶרֶץ כְּנָעַן カナンの地よ)」

全員 : 「エレッツ・カーナーニー (אֶרֶץ כְּנָעַן カナンの地よ)」

北の壁いっぱいに、乾いた大地がひろがっている。
地平線の彼方には、雲をまといつかせた山脈が遠望できる。
彼方の雪の峰から手前にかけては、なだらかな丘陵地帯になっており、
その丘の上に角のある生き物の影が射す。
生き物は牡牛のように見える。

7 結合の神秘

PCは、祭壇の西に回り、東面する。全員が東面する。

PCは両腕を脇に垂して直立し、自分の呼吸に意識を集中する。

全員が両腕を脇に垂して直立し、自分の呼吸に意識を集中する。

PCは、頭部の左右に光球コクマー（左側）と光球ビナー（右側）を視覚化する。

1～2分間、これを可能な限りリアルに視覚化する。

全員が光球コクマーとビナーを視覚化する。

PCは右側頭部の光球ビナーに意識を集中し、ビナーから母音記号ツェレを力を含めずに3回発声する。発声は無理のない範囲で長く続ける。

PC：「アアー アアー アアー」

全員がビナーに意識を集中しつつツェレを3回発声する。

全員：「アアー アアー アアー」

PCは、両側頭部及び喉の上に光球の三幅対（ Γ - Ω - Π ）を下向きの三角形として視覚化し、1～2分間、これを可能な限りリアルに視覚化する。

全員が光球の三幅対（ Γ - Ω - Π ）を視覚化する。

PCは、喉の光球ダースに意識を集中し、ダースから母音記号セゴルを力を含めずに3回発声する。発声は無理のない範囲で長く続ける。

PC：「エアー エアー エアー」

全員がダースに意識を集中しつつセゴルを3回発声する。

全員：「エアー エアー エアー」

PCは、喉の光球ダースから太陽神経叢にある光球ティファレトに力の矢が降りる様子を視覚化し、ダースから母音記号ホレムを力を含めずに3回発声する。発声は無理のない範囲で長く続ける。

PC：「オオー オオー オオー」

全員がダースからティファレトに意識を集中しつつホレムを3回発声する。

全員：「オオー オオー オオー」

PCは、光球ティファレトに意識を集中し、ティファレトから母音記号パタハを長く1回発声する。

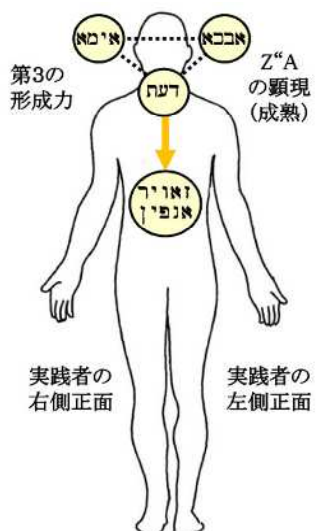
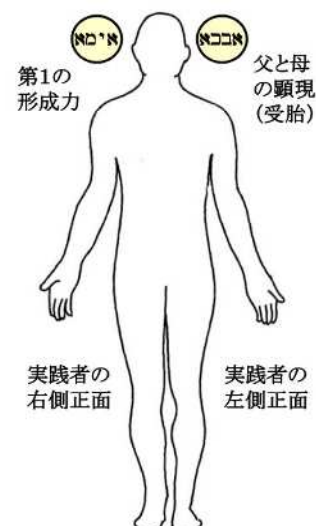
PC：「アーーーーー」

全員がティファレトに意識を集中しつつパタハを長く1回発声する。

全員：「アーーーーー」

PCは高らかに詠唱の声をあげる。

PC：「唄え、歓びの歌を唄え、高みなる生き物よ。叫べ、歓びの音を叫べ、高貴なる乗物よ。驚異なるものを作れ、驚異を。高見に座すわが君を喜ばすべし。」



賛美歌と日々の歌から、時の祝祭と高揚から、聖なる者の口から出でる発話から、侍者の口ずさむ音律から、山をなす火と丘のごとき炎が、日々積み重なり、隠され、しかして溢れでる。

יְיָ (ヤー)こそ名前なり、

יְהוָה אֱלֹהֵינוּ (ヤーヴェ・エロヒム)こそ名前なり、

אֱלֹהֵינוּ (エル)こそ名前なり、

יְהוָה אֱלֹהֵינוּ (ヤーヴェ・エロア・ヴァダアス)こそ名前なり。」⁽²⁶⁾

PCは、両側頭部及び喉の上に光球の三幅対(7-2-7)を下向きの三角形として視覚化し、その下方の太陽神経叢に光球ティファレトを視覚化する。1～2分間、これを可能な限りリアルに視覚化し、続ける。

全員が光球の三幅対(7-2-7)と光球ティファレトを視覚化する。

PCは静かに右手を挙げながら光球ティファレトに意識を集中し、ティファレトから母音記号ホレムを長く1回発声する。

PC:「オオオオオオ」

ホレムの振動とともに光体のティファレト中枢から、熱い光のかたまりが胸を押し上げ、喉をとおり、額をくすぐり、頭頂部を突き抜けて、右手が触れた光球のケテル中枢にまで上昇するのを感じる。

全員が右手を挙げながらティファレトに意識を集中し、ホレムを長く1回発声する。

全員:「オオオオオオ」光の上昇を感じる。

PCは母音記号ホレムの発声を終わったあと、掌を前方に向け、人差指が両足から頭頂まで垂直に人体を貫く中心軸の延長上に触れるようにかざす。そして、光体のケテルから前方の神殿の東壁の上空に座標を有する遙かな天界のケテルに意識を集中する。

PCは「ローム (רֹמַם 天頂よ)」と唱える。

発声とともに、神殿の東壁に門が開き、ケテル神殿が直接見通せるようになる。光の矢がケテル中枢から彼方のケテル神殿まで一直線に飛翔していく。

全員が「ローム (רֹמַם 天頂よ)」と唱える。全員の光体の目がケテル神殿を見て、光の矢を飛ばす。

PCは右手を挙げたまま光球ティファレトに意識を集中し、ティファレトから母音記号シュレクを長く1回発声する。

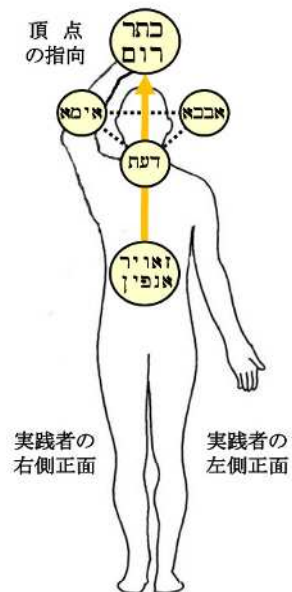
PC:「ウウウウウウ」

シュレクの振動とともに、神殿の東壁に開いた門の彼方から白輝光が射してくる。ケテル神殿から放たれた神聖光が、光体のケテル中枢に照射され、ケテル中枢が強く脈動する。

全員が右手を挙げながらティファレトに意識を集中し、シュレクを長く1回発声する。

全員:「ウウウウウウ」神聖光の到来を感じる。

PCは母音記号シュレクの発声を終わったあと、掌をケテル中枢にかざしたまま、光体のケテル中枢に受けた神聖光を太陽神経叢のあるティファレト中枢に引き下ろす。



(26) 『大へハロート』§§94-95より、整理して引用した。HEKHALOT RABBATI: The Greater Treatise Concerning the Palaces of Heaven, translated by Morton Smith, edited by Don Karr,.

P Cは「ルゥーム（**לִוּם** 至高よ）」と唱える。

それと同時に、ケテル神殿から放たれた神聖光に絡め取られたまま、一瞬で前方に引き寄せられ、神殿の東壁の門を抜け、ケテル神殿に到着する。

全員が「ルゥーム（**לִוּם** 至高よ）」と唱える。発声とともに、ティファレト中枢、胸の中心部に強い衝撃と振動を感じ、同時に途方もない力で前方に引き寄せられ、神殿の東壁中央の門を抜け、瞬時にケテル神殿に引き寄せられる。

天の宮殿に到着した。

大理石の立方祭壇の西側から近づき、P Cが宣言する。

P C：「祈りの声を聞かれない。偉大にして強大なる主よ。

高貴にして慈悲深き君よ、その眼差しは被造物にあまねく下される。

汝が従僕たる祈り手に向き直り、好意を持ち答えたまえ。

全宇宙の主よ、万物の造り主よ、宇宙の一者よ。

わが叫びに答え、天の門を開きたまえ。

汝が膝下にある貴顕の御名を召喚するものなり。」⁽²⁷⁾

P Cが高らかに唄い始める。

P C：「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー・シャーディー
（**לִי יְשׁוּעָה קְבוּץ שְׂדֵי** 汝が導きにわが望みを主よ。）

キー・ビー・ティー・シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー

（**לִי יְשׁוּעָה קְבוּץ שְׂדֵי** 我が望みを主の導かれるままに。）

シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー

（**לִי יְשׁוּעָה קְבוּץ שְׂדֵי** 主の導きに我が望みを。）」

P C：「サティームー・ヴェ・グー・リアー（**סַתִּימוּ וְגוּ לִיָּא**）」

全員：「隠され開示されたり。」

聖化した四方位の風に取り巻かれ、神聖なる貌の臨在のもと、秋分の秘儀に与るときが来た。

P C：「この場は、光と闇の至聖処なり。

今、頭上に秋分の太陽があり、

光は闇と均衡せんとしている。

われは律法の宰相として、

秋分の執行を宣言する。」

(27) James R. Davila, *Descenders to the Chariot*, Boston : Brill, 2001, p.113.

8 秋分の主祭

PCは、神殿の東側から中央を向いて言う。

PC：「祭壇に宇宙の軸を召喚せん。

I a H a V a H a (ヤアー・ハアー・ヴァー・ハアー)

H e V e H e I e (ヘイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ)

V o H o I o H o (ヴォー・ホー・イヨー・ホー)

H I H V (ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ)」

PCが宣言する。

PC：「大いなる周行をもって、祭壇に集中せん。」

祭壇を軸として、3度周行する。

PC：「神秘なる周行は完成し、昼と夜は均衡した。秋分は到来せり。」

PCは、祭壇の西に立ち、東に向かってホルスのサインを行う。

PC：「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

PCは、祭壇の東に立ち、西に向かってハーポクラテスのサインを行う。

PC：「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

PC：「パスワードは交換された。」

全員が祭壇を取り囲む。

PC：「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。

無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、

そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに祭壇を包み込む。

手を放すことなく次を唱える。

全員：「主よ。われらは自らを捧げん。

わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。

汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員、東を向く。

全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！

聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！

聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！

光と闇の主よ。」

9 諸天使の出立

神殿の床が瞬時に溶け落ち、全員がマルクト神殿に降り立った。

PCは祭壇の北に行き、南を向く。

PC：「律法の宰相の加護に感謝する。

靈の虚の場所に戻りたまえ。」

PCは再度、祭壇の西に行き、東を向く。

PC：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。
ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー (𐤓𐤕𐤍𐤕𐤍𐤕𐤍)
万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。
ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー (𐤓𐤕𐤍𐤕𐤍𐤕𐤍)
戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。
光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

PC：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。
主の聖霊は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

10 地上への帰還

PC：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。されば、地上に帰還せん。」

PCは《ヴェールを閉じる》サインを行う。

PC：「イエヘシュアーとイエホバシャーの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

PC：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。(特別な手順は必要ない。) 光の法衣とともに儀式中に刻印された封印、その他の印は精妙界に去る。

その後、静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ(『魔法日記』用)を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

**VERBORVM PVBLICA
I :: O :: S ::
RITVALE DE
AEQVINOCITIO AVTVMNO XIII**

**IMPRIMI POTEST : I :: O :: S ::
NIHIL OBSTAT QVOMINVS IMPRIMATVR
IMPRIMATVR : M.E.S.A. 5=6
SEPTEMBER MMXIII**

秋分儀式 AE 13A

Copyrights © All rights reserved I :: O :: S :: 2013

2013年9月17日 I :: O :: S :: 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I :: O :: S :: の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I :: O :: S :: の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。

表紙図版 : アブラハム・アブラフィア『来るべき世界の生』所載図、1240年(概)